

夜を安心して過ごすとして

高知市で月2回「おるカフェ」

高知市内に月に2回、夜オープンするカフェがある。NPO法人「子どもシェルターおるき」が運営する「おるCafe」。安心して過ごせる居場所のない子どもや若者に無料で開放し、見守っている。支援を必要とする子を持つのではなく、積極的にアプローチしようと、街頭での声かけも行っている。

■延べ122人利用

「おるカフェ」は、おひさ 7〜9時にオープンする。記



「おるカフェ」の室内。午後7時のオープンからほどなく、子どもたちが集まってきた（写真はいずれも高知市番屋町2丁目）

子どもや若者の居場所に



④学生ボランティアの木村美友さん。子どもたちの会話を笑顔で加わる。子どもたちとゲームを楽しむことも。メロンパンナちゃんを見ずに描き、「せーの」で見せ合いっこ



者が訪ねた5月、時間になると、利用者が次々と扉を開けた。「こんばんは」「ジュース飲んでいい?」にぎやかにテーブルに着いた女子たちは高校1年生。お菓子をつまみながら室内にあるギターを弾いたり、ボランディアの高知県立大学生とトランプをしたり。隣のテーブルでは男子のグループがカップ麺をすすり始めた。室内はWi-Fiが利用でき、食べ物や飲み物は無料。思い思いに過ごす様子を大人のスタッフが

フが見守っていた。運営する「子どもシェルターおるき」は、県内の医療、福祉、法曹関係者が集まり、2023年3月に設立した。24年3月には「おるき」と名付けた子どもシェルター（緊急避難場所）を開設。女子専用で定員は6人。児童虐待などで居場所を失った10〜20代が2カ月間をめぐりに暮らし、自立支援などを受けている。利用者は24年度が延べ8人、昨年度は延べ10人。本人からの相談は少なく、ほとんどが行政機関からの紹介で入居に至ったという。理事で弁護士の中島香織さん(49)は「子どもや若者が自ら相談できるように、ハードルを下げて」と考えた。「おるき」を知ってもらったため、昨年7月に街頭で声をかけるアウトリーチの活動を始めた。9月にはカフェをオープンした。

スタッフは当初「居場所のない子どもが高知の街にいない」と半信半疑だったという。だが、都内で若年女性を支援する団体と一緒に高知市内の繁華街を歩いてみると、「支援が必要な子が見えてきた」と中島さん。カフェが開く時間帯に声をかけた人数は、今年3月までの7カ月間で延べ98人。カフェの利用は延べ122人となった。

■「朝まで開けて」

「おるカフェ」では利用者に名前や年齢を聞かない。「騒がない」「入り口でたむろしない」などの約束事を守れば自由に過ごせる。友達に誘われ、4月から利用している女子は「雰囲気は温かくて、スタッフと話しやすい」「マックの裏で座っちゃうよりいい」と笑顔を見せた。

利用者が見えない限り、詳しい情報は聞かないが、会話の中でほろっと本音がこぼれることも。学生ボランティアの木村美友さん(20)は「最近、家に帰ってない」と話してくれた子がいました。午後9時に閉める際には帰るのを待たせたり、外見からは分かりづらいですが、虐待を受けている子、まともに食事を取れていない子、ヤングケアラーで子どもらしい時間奪われている子は高知にもいます」と中島さん。活動継続を目指し「おるき」の公式サイトやインスタグラムで支援を呼びかけている。

取材ノートから

「安全な居場所がない子どもはシェルターに行けばいい、という単純なものではないんです。弁護士の中島香織さんの言葉が耳に残っている。子どもシェルターは、本人の意思で入居するのが決まりました。虐待する親に居場所を知られないように、場所は非公開。入居後は落ち着くまで外出できず、スマホは使えず、外部と連絡が取れなくなる。

失わせる前に

何よりも大切な命を守るための対応だが、「友達、バイト先、彼氏。自分を支えてくれていた人間関係も一度断絶することになる」と中島さん。その決断の重さは到底想像できない。多くのものを失って入居した子どもは「おるき」で安心して眠り、温かいご飯を食べる。信頼できる大人と話し、徐々に笑顔を取り戻す。その過程を見てきたからこそ生じた「失わせる前に何とかしたい」との思いが、アウトリーチ事業の原動力となっている。信念を持って活動する大人たちを支える輪も、同時に広がればと願う。

(門田朋三)